

地下道の北側の壁にパイプやケーブルが張られていたが、その止め金に押しつけられて上着の左側が破れた。痛かったがそれどころではなく流された。地上に出る階段⑩は両側から来た人々で、我れ先にと押し合いとなつてなかなか上がれない。大人が大声で叫んだ。「あわてるな！ 日本人じゃないか！」

この焼夷爆弾は地下道の入り口⑨から飛び込んで地下道内で爆発したものだだった。

地上に出たら、工場内の広場に円形に土嚢を積んだところ⑪があった(高さ70cm位、直径10m位)ので、その中に入った。みんな顔がすすだらけで、誰だか判らないほどだった。私は前掛けのお蔭で顔は何ともなかった。

陸軍中尉の軍人が来て、「ここは危ないから工場の外に逃げろ」と言われたので、すぐ成蹊学園の方に走って行って、畑の中でうろろろしていた。同級生は、顔が赤黒く、痛いから病院へ行くといって土嚢⑪のところでは別れた。

午後4時頃(確かでない)、工場に帰り、同級生がどうしているか心配だったので地下道を通って病院に行った。病院の入り口の地下道には死体や負傷者が両側に並べられていて、悲惨この上もない状況だった(30人～40人いたように思う)。

地下道の頭と頭の間が60cm位のところを歩いていたら、突然右足首を掴まれて動けなくなった。「水をくれ！ 水をくれ！」といって離さない。見ると左眼球が飛び出していて、右目は真っ赤だった。「水を持って来るから」と耳元で言ったら離してくれた。

死体の頭と頭の間を通り抜けて病院に入る

と、大混乱で同級生のことなど答えてくれる人はいなかった。

顔面のやけどなどで休学をした者はいたが死んだ者はいなかった。

(あだち しゅうご/記録する会会員)